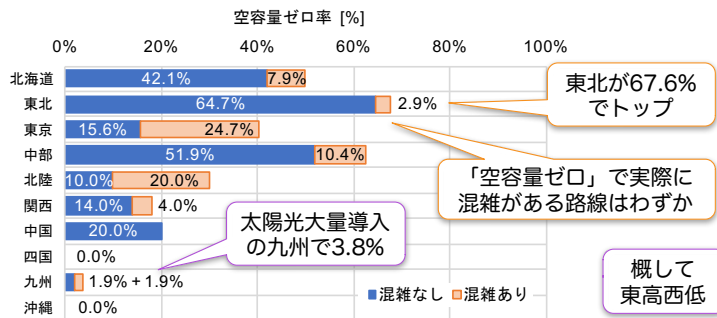


●送電線空容量問題とは何か？

- 利用率の単純な高い低いが問題ではない。皮相的論争ではなく、本質的議論を！
- 空容量の決定方法の不透明性（ブラックボックス状態）が問題。
- 送電線という公共的な設備に対する情報開示が重要。
- 電力会社がけしからん！と批判しても意味はない。
国を挙げたルールメイキングが重要。国民のルールメイキングへの参加が重要。
- 再エネの便益（ベネフィット）と次世代への富の再移転を再確認することが重要。

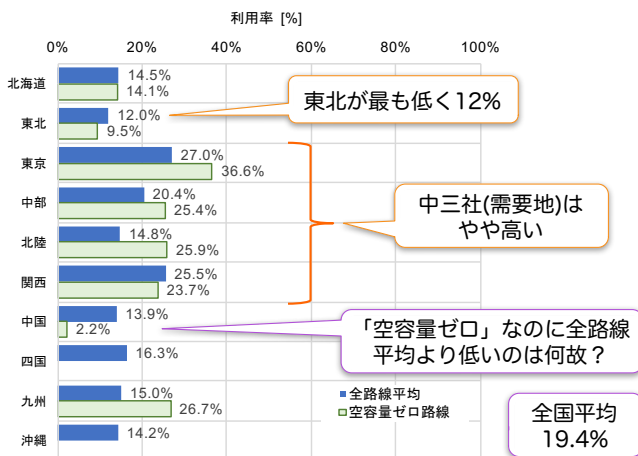
●送電線利用率全国調査分析結果

- 全国 10 電力会社基幹送電線上位 2 系統（広域機関でデータ開示されているもの）全 399 路線を分析。
- 「空容量ゼロ率」（基幹送電線のうち空容量ゼロと公表された路線の比率）。
 - 東北が 67.6%でトップ。「空容量ゼロ」で実際に混雑がある路線はわずか。
 - 全体的に東高西低。→ 各電力会社で実際の運用方法が異なる可能性。
 - 九州は原子力再稼働＋太陽光大量導入にも関わらず空容量ゼロ率は極めて低い。

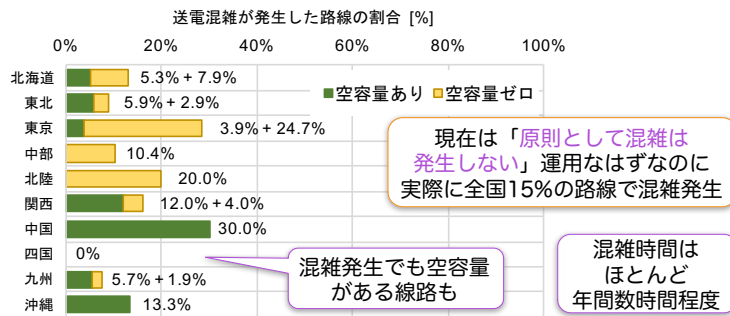


● 全国送電線利用率比較

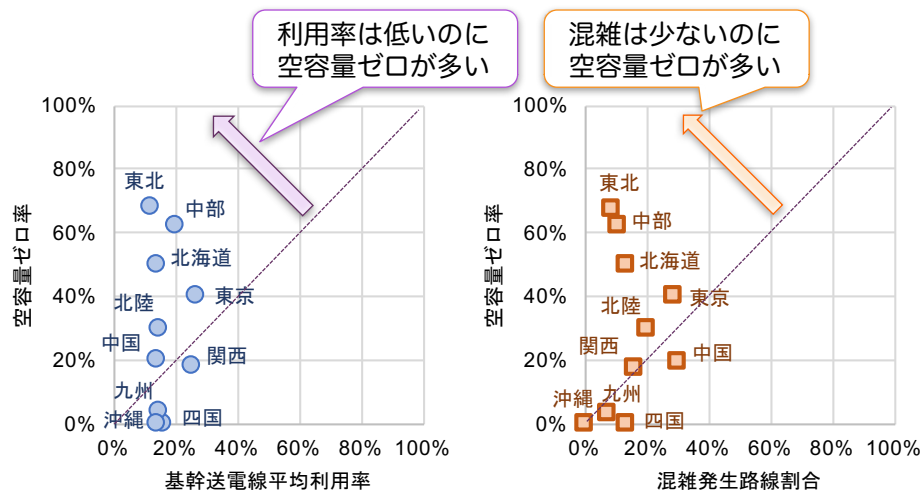
- 大規模需要地を抱える中三社の利用率はやや高い。
- 東北が最も低く 12%。→ むしろ再エネ導入のポテンシャルは大きい？



- 「送電線混雑割合」（基幹送電線のうち混雑（実潮流＞運用容量）が発生した路線の割合）
 - 「原則として混雑は発生しない」（A基準）はずなのに実際に全国15%の路線で混雑発生。
 - 混雑発生でも空容量がある路線も。



- 利用率・混雑割合と空容量ゼロ率との相関
 - いずれも相関はない。→ 各電力会社で実際の運用方法が異なる可能性。
 - 東北・中部・北海道は45°線から遠い。→ なぜ「空容量ゼロ」なのか、説明がつかない。



●送電線空容量問題の深層と解決手段

- 稀頻度事象に対する技術的問題
 - 合理的なリスクマネジメントの問題
 - 発電所の定格容量で計算するのは合理性があるか？
 - ⇒ 実潮流に基づく分析
- 系統運用と系統計画の議論の混同
 - 本来、系統運用の範疇で十分対策できるはずなのに、なぜか系統計画（電源接続）の問題にすり替わっている。
 - ⇒ コネクト&マネージの厳格な推進
- コスト割り当ての問題
 - 再エネ発電事業者に不自然にリスクが転嫁されている。
 - 原因者負担の原則（特定負担）は不公平性しか生まない。
 - 新規技術の参入障壁を作りやすく、社会コスト増大。
 - ⇒ 受益者負担の原則（一般負担）の徹底